



プラトン I

田中美知太郎編

世界古典文学全集

筑 摩 書 房

プラトン I

世界古典文学全集 第14巻

昭和39年8月25日初版発行
昭和48年5月15日7刷発行

訳者代表 田中美知太郎

発行者 井上達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京(291) 7651(代表)
替 東京 4 1 2 3 番
郵便 号 1 0 1 - 9 1

(分類) 0398 (製品) 20314 (出版社) 4604

目次

ソクラテスの弁明	田中美知太郎訳	5
クリトン	田中美知太郎訳	35
パイドン	藤沢令夫訳	51
饗宴	鈴木照雄訳	117
プロタゴラス	藤沢令夫訳	167
メネクセノス	加来彰俊訳	219
メノン	藤沢令夫訳	235
エウテュプロン	森進一訳	279
ラケス	生島幹三訳	303

プ
ラ
ト
ン

ソクラテスの弁明

17

アテナイ人諸君、諸君が、わたしを訴えた人たちの今の話から、どういう印象を受けられたか、それはわからない。しかしわたしは、自分でも、この人たちの話を聞いていて、もう少しで自分を忘れるところでした。そんなにかれらの言うことは、もっともらしかったのです。しかし本当のことは、ほとんど何も言わなかったといつてよいでしょう。なかでも、かれらについて、いちばんわたしのあきれたことが一つある。それはかれらが、ずいぶんわたさんの嘘をついたのですが、そのうちで、あなたがたに、用心しろ、そうでないと、わたしにだまされるぞということを、まるでわたしが、たいした弁論家でもあるかのように、言っていたことです。つまりそんなことをぬけぬけと言っているということは、いまずぐに、どう見ても、わたしがたいした弁論家であるとは見えないという、事実によつて、かれらはわたしのために、完全に反駁されるにきまつているのですから、これこそかれらの、最も恥しらすな点だと、私に思われたのです。もつとも、あるいはこの人たちが、真実を語る者を、弁論の優者であると呼ぶのなら、話は別です。もしかれらのいう意味が、そういうのなら、わたしも、かれらの類ではないにしても、一個の弁論家であることを承認するでしょう。いづれにしても、この人たちは、わたしに言わせれば、ほとんど何も真実のことは言わなかったのです。しかし諸君は、わたしから真実のすべてを聞かれるでしょう。もつとも、ゼウスの神かけて、アテナイ人諸君よ、諸君の聞かれるのは、この人たちの弁論のような、美辞麗句でもって飾りたてられたものではないでしょう。それはあり

あわせの言葉でもって、むぞうさに語られることになるでしょう。それはつまり、わたしの言おうとしていることが、正当であると信ずるからなのです。そして諸君の何びとも、それ以外の弁論を期待してはいけません。なぜなら、それにはまた、諸君よ、わたしのような年の者が、あなたがたの前に呼び出されて、いたずら小僧のように、言いわけをこしらえたりするのは、どうもこの年齢に似つかわしくないだろうということもあるのです。それからまたもう一つ、ぜひ、アテナイ人諸君よ、諸君にお許しを願いたいことがある。それはわたしは、よその場所でも、また市場にある両替屋の店先などでも、ふだんしゃべりつけていて、多数諸君がそこで聞かれたのと、同じ言葉をつかつていま弁明するのを聞かれても、そのために驚いたり、騒いだりしないではしいということ。それはつまり、こういう事情があるからなのです。わたしは、もう年が七十になっているのですが、裁判所へやつて来たのは、いまが初めてなのです。だから、ここの言葉づかいは、わたしにはまるでよその言葉なのです。だから、もし仮りにわたしが、本当によそから来た者だとしたなら、そのなかでわたしが育てられてきた、そのままでの言葉を用い、その話し方をしたところで、きつと諸君は、事情を察して、わたしを許してくれるでしょう。ちょうど諸君と同じこと、いまもまた、このことを諸君にお願いしても、とにかく不当ではあるまいと、わたしは思うのです。どうか言葉づかひのところは、たぶん、下手な言い方をしているところもあるかもしれないし、またまんざらでもないところがあるかもしれないが、あっさり見過ごしておいてください。そしてただ、わたしの言うことが、正しいか否かということだけに注意を向けて、それをよく考えてみてください。なぜなら、そうするのが、裁判をする人のりっぱさというものであり、真実を語るといのが、弁論をする者のりっぱさだからです。

*

さて、それでは、まず最初に、当然わたしが弁明しなければならな

いのは、アテナイ人諸君よ、わたしについてなされた、いつわりの最初の訴えと、その最初の訴人たちに対してでなければならぬのです。そしてそれから、そのあとでなされた訴えと、そのようなあとからの訴人たちを相手にしなければならぬのです。そのわけは、わたしをあなたがたに向かつて訴えている者は、多数いるのでして、かれらはすでに早くから、多年にわたって、しかも何ひとつ本當のことを言わないで、そうしているのです。わたしはその連中を、アニトス一派の人たちよりも、もつと恐れているわけなのですが、むしろ、この一派の人たちも、手ごわい人たちに相違ないので、しかしかれらは、諸君よ、もつと手ごわい連中なのです。それはつまり、かれらが、諸君の大多数を、子供のうちから、手中にまめることで、ソクラテスというやつがいるけれども、これは空中のことを思案したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な智慧をもっているやつなのだという、何ひとつ本當のこともない話を、しきりにして聞かせて、わたしのことを讒訴していたからなのです。アテナイ人諸君、こういう噂を撒きちらした、こういう連中がつまりわたしを訴えている手ごわい連中なのです。それは誰でも、こういう噂を聞けば、そういうことを探り出そうとしているのでは、きつとまた神々を認めないことにもなるだろうと考えるからです。そのうえ、こういう訴人は、多数いるのです。そして長い時間をかけて、訴えてきたのです。しかも、なおそのうえに、かれらが諸君に話しかけた時、そのとき諸君は、あるいは少年であり、あるいはまた青年だったわけで、何のことはない、わたしは欠席裁判にかけられたようなもので、かれらの訴えに対して、誰ひとり弁明する者もなかったわけなのです。Dそして何とも言いようのない、いちばん困ったことは、その連中の名前さえも、ちょうどひとりある喜劇作者がいるということを除いては、それを知ること、申し立てることもできないということです。そして、その連中というのは、嫉妬にかられて、中傷のために、諸君をあ

ざむくような話をしていたわけなのであって、かれらのうちには、自分でもすっかりそう信じこんで、それを他人に説いているような者もあるわけなのですが、いずれもみな厄介至極の連中なのです。というのは、かれらのうちから誰かを、このところへ引っぱり出してきて、これを吟味にかけるといふようなことも、とうていできないのでして、これに弁明をするというのは、何のことはない、まるで自分の影と戦うようなことをしなければならないのでして、誰も答えてくれる者なしに、吟味を行わなければならないからです。だから、どうか諸君も、わたしの言うとおりに、わたしを訴えた人は、二通りあるのだということを確認してください。それはつまり、最近に訴えた人たちと、わたしのいま言っている、古くからの訴人たちです。そしてまず最初に、わたしは弁明しなければならないのは、この連中に対してであると思ってください。諸君もまた、かれらの訴えのほうを、後代のここにいる人たちのそれよりも、もつとさきに、そしていつそ多く聞かされたいわけだからです。

19 まあ、それはそれとして、さあ弁明をしなければならない、アテナイ人諸君、そして諸君が、永い時間をかけて、中傷の結果もつようになつたものを、諸君から取り除くことを試みなければならぬ。それも短時間のうちにそうしなければならぬのです。だから、わたしはそれが、もしそうなるほうが、何か諸君のためにもなり、わたしのためにもなるのなら、そうなることを望み、わたしの弁明が成功すること、希望したいと思うのです。しかしそれは、むずかしいと思うのです。わたしには、それがどんな仕事になるかということが、全然わからないわけではないのです。しかし、まあ、とにかく、そのことの成功は、神のみことにおまかせして、ただ法律の規定に従い、弁明をしなければなりません。

*

さあ、それでは、最初から出直すことにしようではないか。わたし

B に対する中傷が、それによって結実し、メレトスも、まさにそれを信ずることによって、この公訴を提起したところの、そのもとの告訴とは、どういふものなのか。そうだ。中傷者たちは、いったいどういふことを言つて、中傷をしていたのかが問われなければならないのです。だから、かれらをちやうど訴人のように見立てて、かれらの宣誓口述書を読みあげてみなければならない。いわく、ソクラテスは犯罪者である、かれは天上地下のことを探求し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつこの同じことを、他人にも教えているというふのが、まあ、それです。つまりこれは、諸君がまた直接に、アリストパネス喜劇の舞台で、見られたことなのです。そこでは、ひとりのソクラテスという人物が、からくりによって運ばれながら、大気を踏んまえているのだと見得を切つたり、その他いろいろわけのわからない、おしやべりをするのですが、それらについては、大にも小にも、まるつきりわたしは、理解がつかないのです。といつても、それはまた、もし誰か、こういうことならについて、特別の智慧をもっている者があるのなら、そういうような知識を軽蔑する意味で、こんなことを言っているのではないのです。何らかのかたちで、わたしはメレトスから、そういう大罪を問われたくはありません。しかしまあ、これはこれでいいでしょう。これらのことは、アテナイ人諸君よ、わたしの少しも与り知らないことだからです。そしてそれには、あなたがたの大多数を、わたしの証人にしましょう。そしてわたしは要求しますが、かつてわたしの間答を聞いたことのある諸君は、諸君のうちに多数おられるわけですから、どうぞおたがい打ち明けて、話し合ひ、教え合つてください。さあ、それでは、あなたがたは誰か、わたしが、こういうことならについて問答していたのを、大なり小なり、いつか聞いたことがあるか、どうか、おたがいに、打ち明けて、話し合つてください。そうすれば、多くの人たちが、わたしについて言っている、これ以外のこともまた、これと同じようなものであることを、そこから悟られるでしょう。

いずれにしても、それらのことは、どれも事実ではないのですから、かまわないわけですし、またわたしは、人間教育ということに手を出して、そのために金銭をもらひ受けているというようなことを、

(1) 手工業者出身の政治家。民主派の有力者。前四〇四年ペロポネソス戦争でアテナイが敗れた直後、スパルタの勢力を利用して出来たクリティアスの独裁政治の時、隣国ボイオティアに亡命した。しかしまもなくトラシシュブロスらと結んで同志とともにアッティカに侵入し、クリティアスと対戦、この独裁恐怖政治を倒して民主政治を再建するのに功績があつた。アニュトスは思想的には保守的な人として知られているのであつて、ソフィストの新教育啓蒙思想をたいへん嫌つていたことは『メノン』（九〇A以下）にも見られる。クリティアスが啓蒙思想の洗礼を受けたインテリと見られるので、アニュトスにはこのような思想が何か脅威的なものと感ぜられ、したがつて、彼はクリティアスにかかる思想を吹き込んだ師と考えられるソクラテスを、メレトスなどをつかつて訴えさせたものである。

(2) 一九Cでは、アリストパネスの名があげられているのであり、ここでも主としてアリストパネスが考えられているのであらう。しかしソクラテスを喜劇人物にしたのはアリストパネスだけではなかつたのである。

(3) 『エウテュブロン』（二B）では、若くて、まだあまり人に知られていない、と言われ、その容貌は、毛髪の硬直した、鬚の薄い、尖り鼻の男として描かれている。

(4) 『雲』をさす。前四二三年に初演された。息子の馬道案のために負債の利子も払えないという羽目に陥つた田舎出の市民ストレブシアデスが、債権者を法廷で言ひ負かす方法を覚えさせようとして、息子をソクラテス学校へ入れたが、息子の学んで来たのは、親父をなぐつておきながら、この不正な立場をたくみに弁護する論理だったので、怒つた父親が学校の焼打ちを試みる、という筋書のもの。すなわち、ソクラテス学校は正邪にかかわらず議論に勝つ方法を教える所として描かれ、有害と考えられた新教育の代表、として扱われたのであつた。

諸君が誰かから聞かれたとしても、それもまた本当ではないのです。Eもつとも、こういうことも、もしひとが人間としての教育というものを
 行うことができるのなら、結構なことだと、わたしは思っているの
 です。ちやうど、レオンティノイのゴルギアスやケオスのプロディコ
 ス、エリスのヒピアスなどが、それに当るでしょう。というのは、
 これらの連中は誰でも、諸君よ、できるのです。どこの国へでも出か
 けて行つて、その青年たちに、かれらは、自分の国の人なら、誰と
 でも好きな人と、ただで交際することができるようになるのに、そういう人た
 ちとの交際をすてて、自分たちといっしょになるように説きすすめ、そ
 れに対して金銭を支払わせ、おまけに感謝の情まで起させるという、
 そういうことができるのです。そういえば、もう一人、パロスの者で、
 いまこつちへ来ている智者がいますよ。わたしはその者が、この地に
 滞在しているのを知ったのです。というのは、ソフィストに対しては
 かの人たちが全部で支払ったよりも、もっと多くの金銭をつかった人
 つまりヒッポニコスのところのカリアスに、ちやうど出会ったからで
 す。その時わたしは、かれに聞いてやりました。というのは、かれに
 は二人の息子があつたからです。カリアスよ、とわたしは言つたので
 す。もし君の息子が、かりに仔馬や仔牛であつたとするならば、かれ
 らのために監督者となる者を見つけ出して、これに報酬を払つて、息
 子たちを、しかるべき徳をそなえた、立派な者にしてもらふことがで
 きるだろう。またそういう監督者は、誰か馬事や農事に明るい者のう
 ちに見つけることができる。しかし現実には、君の息子は人間
 なのだから、どういう者を、かれらの監督者として取るつもりで、君
 はいいるのかね。誰かそういうふうな、人間として、また国家社会（ポ
 リス）の一員としてもつべき徳を、知っている者があるだろうか。つ
 まり君は、息子さんをもっているのだから、こういうことを、もう考
 えていると思うのだ。ね、どうだろう、誰かあるかしら、それとも、
 ないだろうかと、こうわたしが言つたら、あるとも、大ありだと、か
 れは答えたのです。それは誰だ、とわたしは言いました。そしてどこ

の者だ、またいくら出せば、教えてくれるのだとも聞きました。そう
 すると、エウエノスというのだ、ソクラテス、パロスの者で、報酬は
 五ムナだ、と言いました。そこでわたしは、そのエウエノスを、ほん
 とうにそういう技術の心得があつて、そのようなところあいの値段で、
 教えているのなら、それは羨しいくらいの人だと言つてやりました。
 実際、とにかく、もしわたしが、そういう知識をもっているのだとし
 たら、自分でも、それを榮えあることとして、さぞ得意になったこと
 でしょうからね。しかしまちがわないでください。わたしはそういう
 知識を、もつてはいないのですから。アテナイ人諸君。

*

そうすると、誰かあなたがたのうちで、たぶん、すぐにこうたずね
 る人があるでしょう。しかしソクラテス、君の仕事は、何なのだ。ど
 こから、君に対する、こういう中傷が生まれてきたのだ。なぜなら、
 君という人が、ほかの人のしない、よけいなことを、何もことさらに
 してはいないのに、こういう噂や評判が立つはずは、たぶんきつとな
 かつただろう。もしも君が、大多数の人たちと、何か違ったことをし
 ていたのではないならばだね。だから、どうか、君のしていることが
 何なのか、それをわれわれに言ってくれたまえ。そうすれば、われわ
 れも君について、軽率な判断をしないですむだろうと、こう言う人
 があるなら、わたしはそれを、もつともな言い分であると思う。だから
 わたしも、いったい何がわたしに、こういう名前をもたらし、こうい
 う中傷を受けるようにしたのかを、諸君に明かすようにしてみよう。
 さあ、聞いてください。そしてたぶん、諸君のうちには、わたしが冗
 談を言っているのだと思うひともあるかもしれないけれども、しかし
 これからわたしが話そうとすることは、全部ほんとうのことなのだか
 ら、どうか、そのつもりで聞いてください。というのは、アテナイ人
 諸君、わたしがこの名前を得ているのは、とにかく、あるひとつの智
 慧をもっているからだということには、まちがいないのです。すると、

それはいい、という種類の智慧なのでしょう。たぶん、それは人間なみの智慧なのでしょう。なぜなら、実際にわたしがついてるらしい智慧というのは、おそらくそういう智慧らしいからです。これに反して、わたしが今しがたお話ししていた人たちというのは、たぶん、何か人間なみ以上の智慧をもつ、智者なのかもしれません。それとも、何と言ったらよいでしょうか、わたしにはわからない。なぜなら、とにかくわたしは、そういう智慧を心得てはいないからです。それをしかし、わたしが心得ていると主張するひとがあるなら、それは嘘をついているのです。そういうことを言うのは、わたしを中傷するためなのです。それで、どうか、アテナイ人諸君よ、わたしが何か大きなことを言っていると、諸君に思われたにしても、騒がないようにしてください。というのは、これからここで言われることは、わたしを言うにしても、それはわたしの言葉ではないのでして、わたしはその言葉が、ちゃんとした権威にもついているのだということとを、あなたがたにはつきり示すことができるからです。というのは、わたしに、もし何か智慧があるのだとするならば、そのわたしの智慧について、それがまたどういふ種類のものであるかということについて、わたしはデルポイの神（アポロン）の証言を、諸君に提出するでしょう。というのは、カイレポンを、たぶん、諸君はごぞんじであらう。あれはわたしの、若い時からの友人で、あなたがたの大多数とも、

(1) 以下二人ともに有名なソフィスト。

レオンティノイはシリイ島東岸の都市で、イオニア系の植民地。前四三一年にペロポネソス戦争が起ったころはアテナイと同盟関係にあり、ドルリス系植民諸都市に圧迫されてアテナイに救援を求めたりしているが、ゴルギアスはこの使節の主席代表であつて、その演説で、当時青年であつたクリテアスやアルキビアデスを魅惑したと言われている。のちレオンティノイに政変が起つたので、ギリシア北部テッサリアの都市ラリサに亡命、ここでソフィストとしての盛名を得た。ラリサはペロポネソス戦争中だいたいアテ

ナイと友好関係にあつたようで、『ゴルギアス』に見られるようなゴルギアスのアテナイ滞在もしばしばあつたと思われる。

(2) ケオスはアッティカ南東海上の島。プロディコスの生涯については正確なことはあまりわかつていないが、彼もまたゴルギアスのように、ケオスの外交使節としてアテナイに來たことがあり、公用のかたわら私的の講演をしては金銭を得ていたことが『大ヒッピアス』(二八二C)等に見えている。

(3) エリスはペロポネソスの北西、オリュンピアの聖地を持つ国。ヒッピアスの生涯についても、これまたほとんど何も知られていない。ただ彼もまた外交使節として諸国、特にスパルタに派遣されたということ、またソフィストとしてシリイ島に赴き、そこにいた老プロタゴラスの向こうをはつて多額の収入を得ていたことが『大ヒッピアス』(二八一A、二八二E)に見られ、さらにきわめて多才な人でとりわけ輝かしい記憶力を持っていたことが『小ヒッピアス』(三六八B以下、ビロストラトス(P. 368)に見られる。

(4) 財産相続でギリシア随一の富豪となつたと言われている。プラトンの『プロタゴラス』はこのカリ阿斯邸の会合を描き、クセノポンの『饗宴』は、このカリアスのペイライエウスにおける別邸の会合となつている。彼はしかし財産を蕩尽して晩年は貧窮のうちに死んだと言われている。

(5) 『パイドン』(六〇D)では、詩人として、また哲學者として(六一C)扱われ、『パイドロス』(二六七A)では弁論術の教師となつてゐる。

(6) ムナは一〇〇ドラクマ。一ドラクマを四〇〇円近い金額として計算すると、五ムナではほぼ二万円ということになる。一ドラクマを英貨八ペンスとしての計算である。

(7) 彼は若い時からのソクラテスの仲間と言われ、アリストパネスの劇『雲』(一四四—一五六、五〇三、一五〇五行)『鳥』(二五五—一五六四行)でも特にソクラテスの仲間として扱われている。やせた蒼白い人物で、蝙蝠とか夜の子とか言つて喜劇作家たちに笑われたり罵られたりして皆に知られていたもの。しかしまだ彼はアニュストと同じ民主派の仲間で、クリテアスの独裁制革命の際には、彼もまた亡命し、アテナイに民主制が回復するまでその仲間と行動をとにした。したがつて、ソクラテスが自分の仲間カイレボンのことを、告発者アニュストらと同じ仲間だったものとして語るとき、そこには特別なふくみを感じられるのである。

同じ仲間^{仲間}に属し、先年はあなたがたといっしょに、国外に亡命し、またいっしょに帰国しました。そしてまた、カイレボンがどういう性質の者だったかということも、諸君はごぞんじだ。あれは何をやり出しても、熱中するたちだったのです。それでこの場合も、いつだったかデルボイへ出かけて行つて、こういうことで、神託を受けることをあえてしたのです。それで、そのことをこれからお話しするわけなのですが、どうか諸君、そのことで騒がないようにしていただきます。それはつまり、わたしよりも誰か智慧のある者がいるか、どうかということ、たずねたのです。すると、その巫女は、より智慧のある者は誰もいないと答えたのです。そしてこれらのことについては、かれはもうこの世の人ではないのですから、ここに来てゐる、かれの兄弟が、あなたがたに対して証言するでしょう。

—— (証人の証言が行われる) ——

さあ、それでは、何のためにわたしが、こういうことを言うのか、B 考えてみてください。それはつまり、わたしに対する中傷が、どこから生じたかを、いまこれから諸君にわかつてもらいたいと思うからなのです。というのは、いまの神託のことを聞いてから、わたしはここに、こういうふう^{この}に考えたのです。いったい何を神は言おうとしているのであろうか。いったい何の謎をかけているのであろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、智慧のある者なんかではないのだということを自覚しているからです。すると、そのわたしをいちばん智慧があると宣言することによって、いったい何を神は言おうとしているのであろうか。というのは、まさか嘘をいうはずはないからだ。なぜなら、神にあっては、それはあるまじきことだからです。そして永い間、いったい何を神は言おうとしているのであろうかと、わたしは思い迷つていたのです。そして全くやつとのことで、その意味を、何か次のような仕方^{この}で、たずねてみることにしたのです。それは

誰か、智慧があると思われている者のうちの一人を訪ねることだったC のです。ほかはとにかく、そこへ行けば、神託を反駁して、ほら、この者のほうが、わたしよりも智慧があるのです。それなのに、あなたはわたしを、智者だといわれたというふうに、託宣にむかつてはつきり言うことができるだろうというわけなのです。ところが、仔細にその人物——というだけで、特に名前をあげて言う必要は何もないでしょう。それは政界の人だったのですが、その人物を相手に、これと問答をしながら、観察しているうちに、何か次のようなことを経験したのです。つまりこの人は、他の多くの人たちに、智慧のある人物だと思われているらしく、また特に自分自身でも、そう思いこんでゐるらしいけれども、実はそうではないのだと、わたしには思われるようになったのです。そしてそう^{この}なつた時に、わたしはかれに、君は智慧があると思つてゐるけれども、そうではないのだということを、はっきりりわからせてやろうと努めたのです。すると、その結果、わたしはその男にも、またその場にいた多くの者にも、にくまれることになったのです。

しかしわたしは、自分ひとりになった時、こう考えたのです。この人間より、わたしは智慧がある。なぜなら、この男もわたしも、おそらく善美のことがらは、何も知らないらしいけれども、この男は、知らないのに、何か知つてゐるように思つてゐるが、わたしは、知らないから、そのとおりに、また知らないと思つてゐる。だから、つまりこのちよつとしたことで、わたしのほうが智慧のあることになるらしい。つまりわたしは、知らないことは、知らないと思う、ただそれだけのことで、まさつてゐるらしいのです。そしてその者のところからまた別の、もつと智慧があると思われている者のところへも行ったのですが、やはりまた、わたしはそれと同じ思いをしたのです。そしてそこにおいてもまた、その者や他の多くの者どもの、にくしみを受けることになったのです。

それで、それ以後、今日まで、次から次へと歩いてみたのです。自分がにくまれているということは、わかっていたし、それは苦にもなり、心配にもなったのですが、しかしそれでもやはり、神のことをいばんたいせつにしなければならぬと思えたのです。ですから、神託の意味をたずねて、およそ何か知っていると思われる人があれば、誰のところへでも、すべて行かなければならぬと思ったのです。そして犬に誓って、アテナイ人諸君、諸君には本当のことを言わなければならぬのですから、誓っています。わたしとしては、こういう経験をしたのです。つまり名前のいちばんよく聞えている人が、神命によってしらべてみると、思慮の点では、まあ九分九厘までは、かえって最も多く欠けていると、わたしには思えたのです。これに反して、つまらない身分の人が、その点むしろ立派に思えたのです。まあ、とにかく、わたしのその遍歴というものを、諸君のお目にかけなければならぬ。それはまるで、ヘラクレスの難業みたいなものなのです。結局は、神託に言われていたことが、わたしにとっては、否定できないものなのだということになるのです。

さて、そのことですが、政治家のつぎに、わたしがたずねていったのは、悲劇とか、ディテュランボスとか、その他の作者のところなのです。今度こそは、わたしがその人たちよりも智慧のよいところを、現場で押えられるだろうという見こみだったのです。そこで、これらの作品から、わたしが見て、いちばん入念の仕事がしてあると思えたのを取り上げて、これは何を言おうとしたのかと、つっこんで質問をしてみました。それは同時に何かまた、もつとかれらから教えてもらえるものがあるだろうというわけだったのです。ところが、諸君、わたしは諸君に、本当のことを言うのを恥じる。でも、やはりそれは、話さなければならぬことなのです。言ってみれば、ほとんどその場にいる全部の人といってもよいくらいの人たちが、作者たるかれら自

身よりも、その作品について、もつとよくその意味を語ることができたろうということです。その結果、これらの作家についてもまた、**C**またわずかの間に、こういうことを知りました。かれらがその作品を作るのは、自分の智慧によるのではなくて、何か生れつきのままのものによるのであり、神がかりにかかるからなのであって、それは神の啓示を取りつぎ、神託を伝える人たちと同じようなものだということです。なぜなら、この人たちもまた、結構なことを、いろいろたくさん口では言うけれども、その言っていることの意味を、何も知っていないからです。わたしの見るころでは、作家たちもまた、これに似たような弱点をもっていることは、明らかなのです。そしてこれと同時に、またわたしは、かれらが作家として活動しているということから、自分が世にもたいへん智慧ある人間だということを、自分が実際にそうでない、他のことがらについても、信じこんでいるのに気がついたので。そこでわたしは、またかれらのところから離れ去ったのです。ちょうど政治家の場合と、同じがいでもって、わたしのほうがまだましだと思ひながら。

*

それから最後に、わたしは手に技能をもつ人たちのところへ行ききました。それは自分自身は、ほとんど何の心得もないことが、直接よくわかっていたし、これに反して、かれらのほうは、いろいろ立派な心得のあることが、やがて明らかにになるにきまつていとわかっていたからです。そしてこの点においては、わたしは欺かれなかつたわけですからわたしは、知らないことを知っていて、その点では、わたしよりもすぐれた智慧をもっていました。しかしながら、アテナイ人諸君、このすぐれた手工者たちもまた、作家たちと同じ誤りを犯しているように、わたしには思えたのです。つまり技術上の仕上げが上手にやれるからというので、めいめいそれ以外のたいせつなことがらについても、当然、自分が最高の智者だと考えているのでして、かれらの

その不調法が、せっかくのかれらの智慧を蔽^{おほ}いかくすようになっていたのです。そこでわたしは、神託に代って、わたし自身に問い直してみたいのです。どちらがわたしにとって、我慢のできることなのだろうか。いまわたしは、かれらのもっている智慧は、少しもこれをもっていないが、またかれらの無智も、そのままわたし自身の無智とはなっていないが、これはこのままのほうがいいのだろうか、それとも、かれらの智慧と無智とを、二つとも所有するほうがいいのだろうか、どっちだろうというのです。これに対してわたしは、わたし自身と神託とに、このままでいるほうが、わたしのためにいいのだ、という答えをしたのです。

*

つまり、こういう詮索^{せんさく}をしたことから、アテナイ人諸君、たくさん
 の敵意が、わたしに向けられることになってしまったのです。それは
 いかにも厄介至極な、このうえなく堪えがたいものなのでして、多く
 の中傷も、ここから生ずるといふ結果になったのです。しかし名前は、
 智者だというように言われるのです。なぜなら、どの場合においても、
 わたしが他の者を、何かのことでやりこめるとすると、そのことにつ
 いては、わたし自身は智慧をもっているのだと、その場にいる人たちは、
 考えるからなのです。しかし実際はおそらく、諸君よ、神だけが
 本当の智者なのかもしれないのです。そして人間の智慧というような
 ものは、何かもうまるで価値のないものなのだということを、この神
 託のなかで、神は言おうとしているのかもしれないません。そしてそれは、
 ここにいるこのソクラテスのことを言っているように見えるのですが、
 わたしの名前は、つけたしに用いているだけのようです。つまりわた
 しを一例にとつて、人間たちよ、おまえたちのうちで、いちばん智慧
 のある者というのは、誰でもソクラテスのように、自分は智慧に對し
 ては、実際は何の値うちもないものなのだということを知った者が、
 それなのだと、言おうとしているようなものです。だから、これがつ

まり、いままなおわたしが、そこらを歩きまわって、この町の者でも、
 よその者でも、誰か智慧のある者だと思えば、神の指図に従って、こ
 れを探して、しらべているわけなのです。そして智慧があるとは思え
 ない場合には、神の手助けをして、智者ではないぞということを、明
 らかにしているのです。そしてこの仕事に忙しいために、公私いづれ
 C のことも、これぞと言うほどのことを行う暇がなくて、ひどい貧乏を
 しているのですが、これも神に仕えるためだったのです。

*

なおまた、そのほかに、若い者で、暇がたいへん多く、金も非常に
 多い家の者が、何ということなしに、自分たちのほうから、わたしに
 ついて来て、世間の人がしらべあげられるのを、興味をもって傍聴し、
 しらべ自分たちで、わたしのまねをしても、そのために、他のひとを
 しらべあげるようなことを、してみることもなかったのです。そして
 その結果、世間には、何か知っているつもりで、その実、わずかし
 知らないとか、何も知らないとかいいう者が、むやみにたくさんいるこ
 とを、発見したのだと思います。すると、そのことから、かれらのた
 めにしらべあげられた人たちは、自分自身に對して腹を立てないで、
 D わたしに向かつて腹を立て、ソクラテスは実にけしからんやつで、若
 い者によくない影響を与えていると言いうようになったのです。そして
 それは、何を、何を教えるからなのですかと、たずねるひとがあつ
 ても、そんなことは知らないし、答えることもできないのです。しか
 しその困っているところを、そう思われないうちに、学問をしている
 者について、すぐ言われるような、例の「空中や地下のこと」とか、
 「神々を認めない」とか、「弱論を強弁する」とかいうことをのべてい
 るのです。それはつまり、かれらが本当のことを言いたくないからだ
 ろう、と思うのです。なぜなら、そうすれば、知ったかぶりをしてい
 E て、何も知らないのだということが、暴露するからなのです。そこ
 で、かれらは、負けん気だけは強いのですから、はげしい勢いで、多

数をもつて、組織的かつ説得的に、わたしについて語り、以前から今日にいたるまで、猛烈な中傷を行なつて、諸君の耳をふさいでしまつたのです。メレトスが、わたしに攻撃を加えたのも、アニュトスやリュコンがそうしたのも、こういうことがもとなのでした、メレトスは作家を代表し、アニュトスは手工者と政治家のために、リュコンは評論家の立場から、わたしをにくんでいるわけなのです。したがつて、ちょうど最初に言つたことですが、いまこんな大きくなつてしまつたこの中傷を、このわずかの時間で、諸君から取り除くことが、わたしにできたとしたら、わたしはそれを不思議とするでしょう。このことは、いいですが、アテナイ人諸君、本当のことなのです。わたしは諸君に対して、大小いづれのことでも、かくしだしてもせず、ごまかしもせず、話をしているのです。むしろ、そんなことをするからこそ、にくまれるのだということも、知らないではありません。しかしそれこそまさに、わたしの言っていることが本当だという、証拠になるのです。つまりわたしに対する中傷が、いまお話ししようなものであります。その原因も、以上のごときものだといふことです。そして今からBでも、また別の機会にでも、このことを諸君がしらべてみられるなら、いま言つたようなことがわかるでしょう。

*

かくて、わたしの最初の訴人が訴えていたことがらについては、以上で、諸君に対する弁明は、いちおう充分だということにしたいのです。しかしながら、メレトスという、善良な自称愛国者をはじめとする、後期の訴人に対する弁明が、これから試みられなければなりません。すなわち、もう一度、それでは、これから別種の訴人と見なして、その宣誓口述書となるものを、別に取り上げてみましょう。それはだいたいこんなふうなものなのです。ソクラテスは犯罪人である。青年Cに対して有害な影響を与え、国家の認める神々を認めずに、別の新しい鬼神のたぐいを祭るがゆえにという、こういうのが、その訴えなの

です。そこでこの訴えの各項を、ひとつずつしらべてみることにしましょう。

すなわちその主張するところでは、わたしの罪は、青年に害を与えているというところにあるわけなのですが、これに対してわたしは、アテナイ人諸君、メレトスこそ犯罪人であると主張する。なぜなら、これはこれまでで少しも関心をもつたことのないことがらについて、まじめに心配しているようなふうをして、軽々しく人を裁判ざたにまきこんだりしているが、これはふざけていながら、まじめなふうをしているということなのです。どうして、しかし、それがそうなのかということは、これから諸君にも、はっきりわかるようにしてみしましょう。

*

Dでは、どうか、ここへ来て、メレトス君、答えてくれたまえ。どうだね、君がたいせつだと思つてゐることは、もつと若い諸君が、できるだけ善くなつてくれるようにということなのかね。

『そうだ』

さあ、それなら、今度は、かれらをだんだんに善いほうへ向けてくれるのは、誰かということ、この人たちに言つてくれたまえ。なぜなら、君がこのことに関心をもっているかぎり、むしろ、君は知つてゐるはずなのだから。つまり君は、害を与えて悪くするやつを見つけて出したという振れこみで、僕を訴えて、この人たちの前に呼び出しているからいなのだからね。しかしそれなら、善いほうへ導くのは、何ものか、さあ、それを言つて、この人たちに明かしてくれたまえ。

ほら見たまえ、君は答えることができずに、黙つてゐるではないか。しかしこれは、はずかしいことだとは、君に思われないのか。そして(1) 古注によると、彼はもとイオニア系のひとで、アテナイのトリコヌスの住民。貧乏が喜劇作者によつて笑ひものにされたといわれている。ディオゲネス・ラエティアオス(1、三八)によると、リュコンがソクラテス告訴のいっさいの準備をしたということである。

これは、ちょうど僕の言っている、君はこれに何の関心ももっていないのだということの、充分な証拠になるとは思わないのか。まあとにかく、君、言ってくれたまえ。かれらを善いほうへ導くのは、何なのか。

『法律だ』

E いや、しかしそれは、僕のきいていることではないのだよ、君。むしろ人間をきいているのだ。はじめに、その法律というものを、直接に知るのには、誰かということなのだよ。

『それは、ソクラテス、ここにいる裁判委員たちだ』

という、どういう意味なのかね、メレトス。この人たちが、青年を教育することができるのであり、かれらを善いほうへと導いているのだというのかね。

『大いにそのとおりだ』

それは、このすべての人がそうなのか、それとも、このうちにも、そうする人と、そうしない人があるのかね。

『すべての人がそうするのだ』

いや、君の話は、ヘラに誓って、たしかに結構な話だ。善くしてくれる人が、ありあまるほど、たくさんいるというのだからね。それなら、いったい、どうなのかね。ここにいる傍聴人たちは、善いほうへ導くのだろうか。それとも、そうではないのだろうか。

『この人たちも、そうするのだ』

では、政務審議会の議員たちは、いったい、どうなのかね。

『政務審議会の議員たちも、そうなのだ』

しかし、それなら、メレトス、国民議会に集まる、あの議員たちが、年少者たちに害を与えるということは、まさかあるまいね。いや、あの人たちもまた、全員が善いほうへ導くわけなのだろう。

『そうだ、あの人たちもだ』

してみると、僕をのぞけば、アテナイ人のすべてが、立派な善い人間をつくっているのであって、ただ僕だけが、これを悪くしていると

いうのが、これが君の言おうとしていたことなのかね。

『そうとも、それがわたしのせつに、大いに言おうとしていることなのだ』

いや、これはたいへんなふしあわせを、僕は君のために認められたことになる。それなら、どうか、ひとつ答えてくれたまえ。そもそもB君は、馬についても、そうだと思うかね。これを善くするのは、人間だれでもすべてが、そうなのであって、誰か一人だけが、それを悪くするのだろうか。それとも、むしろその正反対で、これを善くすることができるのは、誰か一人あるだけか、あるいはごく少数あるだけなのかであって、大部分の人間は、馬といっしょにいて、馬を使ったりすれば、これを悪くするのではないか。どうだ、メレトス、こうではないのか、馬のことにしても、その他の動物のことにしてもだ。むしろ、このことは、君やアニュトスが、これに反対しよう、また賛成しよう、いずれにしても、それにきまっていると思うのだ。なぜなら、青年たちのために、もした一人だけが、これに害を与えて、その他の者は、みな利益を与えるのだとしたら、それは何ともたいへん幸福なことになるだろうからね。いや、しかし、メレトス君、君はすっかり、はつきりさせてくれたことになるのだ。青年のことなど、これまで君は一度も心配したことはなかったのだということをね。つまり僕をここへ引っぱり出した、その問題について、君は何の関心ももっていないかったという、君のその無関心ぶりを、いまはつきりと、君は示しているのだ。

*

しかし、もう一つ、われわれのために、ゼウスの神にかけて、言ってもらいたいことがあるのだよ、メレトス君、つまり住むのには、善い市民のうちに住むのと、悪い市民のうちに住むのと、どっちがいいだろうか。ええ、君、君の答えを、どうか言ってくれたまえ。僕のきいていることは、ほら、ね、何もむずかしいことではないのだ。悪い